

21

文化六年『花供養』

# 花供養

底本・石川歴博  
校異・武蔵野

表紙・原題僉

表紙見返し

これの一とち花供養てふ名に  
呼びて、祖翁の精神を  
仰ぎまつり、永くその跡を世に  
伝えむとの較計、また／＼故師  
蘭更うしの高きいさをし、  
あらたにことを添ふるもいと  
腹くろきわざながら、尚久後

も此さくら木のさかへ／＼て、  
年毎のけふに偶はむことを  
陰たのむ。今のあるじ蒼虬うし  
にかはりて

文化むつの春三月像前に  
ちぎり花奉るの日

鳩の屋文常しるす

手をはなす桜や直に夕曇

畔ぬり仕舞ふ小田の静さ

鵜づかひが家のうちより春暮て

草履四五足はき古しけり

かた側は並木の残る裏通り

すなまぶれし秋のみるふさ

素人

蒼虬

月峰

歌舌

漢水

古光

燕の別れを告る朝月に

あすの御幸も寒き帷子

くやしさは箸がこけても年を寄

大樹の町へ家買て行

菊少しあやめも少し花持て

まだ阿伽棚のけさは濡ざる

へりもせぬ岩の細橋むかしより

燃るやいなやきゆる笹の火

白黛

一熊

千阿

得終

斗雪

布雪

馬遊

一之

鎧着て此まゝ年も取事か

こゝも枕のしたの有明

秋雨にしめる襖のひは／＼と

雀の扶持に残す粟の穂

貝売を踏ても念仏申さるゝ

冷泉どのへは今に立入

はれの夜は犬もとがめぬ気色にて

なはしろ作る水ひきに行

花水

玉花

仙風

雪雄

魯縞

其成

梅價

十壺

もの陰はまだ雪残る巫女が宿

君とさし向朝も有けり

飛鳥に何もあてなき飯の菜

峠を下りる肥後の長持

靄ふかき半に桐の花みへて

みな出て誉る初川の鮎

子供等がひとりの祖父に付ありき

御廟の箒別にして置

峻英

荳嵐

儲史

万栖

宋也

几蘭

岱李

百池



下市は少しの雨もたよるところ  
鶏のやもめについ冬が来る  
憂時は垣根に出て立ばかり  
よるの心にちかき浪音  
せき守が古き疝気に月澄て  
盆と節句の間の寂しき

千代道  
真菅  
国雄  
成雄  
宇洋  
執筆

右一順下略

あした散花がみへけりはつ桜  
鞠垣の外に椿のさかり哉  
紀の関を越せば付けり虻の声  
かげろふの山はふたつに成にけり  
梅が香やなれがましくも旅枕  
藤棚を潜り習ふか雀の子  
はる風の出て来る家のあはひ哉  
鶯の一日来ねば雪の降

肥前長崎

吾友 恕交 其映 里幽 徳隣 天外 鞍風 烏孝  
、 、 、 、 、 、 、

明がたや一しきりづゝなく蛙  
 行雁のあと白雲のかぎり哉  
 吹風の末は霞と成にけり  
 おく山や春の残りの家一つ  
 有明の空は広いぞ鳴蛙  
 春の水あはたゞしくは来ざりけり  
 遅日を裾野の花に立にけり  
 寝入らふとすれば桜に雨の音  
 梅が香のうしろ成けり三日の月

諫早  
 、 、 、 、 、 、  
 夏 春 榎 祥 李 二 可 菊 如  
 亮 芦 江 禾 溪 九 龍 也 蕙

觜太のつゝき出しけり春の水  
 十六夜の前に突出ぬ東やま  
 梅がゝの大川越えて来たりけり  
 のどけさや植て久しき松柏  
 朝／＼の気色取出す柳哉  
 あさ風の吹殖しけり揚雲雀  
 花咲て山寺の木はなかりけり  
 家ありて家がつたなし鳴蛙  
 ざうさなく雨にもぬるゝ二月哉

島原 文塘 芳笠  
 良彦 利貞 澧波  
 岡艾 汝川 琪風  
 神代 鸞洲

松風の日暮を二月気色かな

そゞろにはくれぬ桜の夕べ哉

榎杉やさくら持ねばならぬ家

夜の明る雲おそろしや雉子の声

ゆふ暮は雫しさうな柳かな

長閑さや菜の花にきて鐘の声

草の香に月を広ぐるやよひ哉  
仁和寺に雲の下り居る二月かな

、 、  
平戸 霞林 春喬

、 、  
長崎 李薰 其外

、  
肥後熊本 有無 可交  
、 恕風 蟻城

山里やちりそめてより梅の花  
 梨の花空に雲なき山路哉  
 古き世に似たり外山の春の暁  
 あかつゝじ春一ぱいを咲にけり  
 やまと路を問はれて柳放しけり  
 恥しき花やむかしの城戸の跡  
 鐘にそひ桜を植る人のあり  
 ふねの夜の花に明たり志賀の里  
 瀧のをと聞も定めず春の月

仙斧 斜葉 壬辰 蘭戸 岫丸 萩里 萩原 熊本 李溪 梧井  
 、 、 、 、 、 、 、 、

おそ桜此あと咲散花は何  
春の水闇の田面のかぎり哉  
はる風やどちら向ても梅みゆる  
平横におし行山の霞かな  
いくつれも暮をもて行桜かな  
いふ事を忘れて居たり花の陰  
春の野のうちにも這入庵かな  
はつぎくら東をさして人の行  
雀子につか／＼朝のあらし哉

千種庵  
肥後  
小島  
眠石  
慶遊  
草斧  
車夫  
白飛  
鳥朝  
九古

石工の藤の夕べを残しけり

、 徐風

柴橋の向ふに寒き桜かな  
やまざくら山の端にはなかりけり  
花にみち月におろかもなかりけり

豊後日田 魚舌  
、 有篁  
臼杵 峻英

山陰や古木を出る春の月  
ひといきは小鳥も鳴かず散桜  
腰かけて居られぬ花の散にけり

筑前博多 扈詞  
、 凡馬  
、 完夫



おぼろ夜と成て影もつ小草哉  
 夕ぐれや花咲告る人のかほ  
 出る月を立向ても帰る雁  
 家のうちに寝はするものゝ花の陰  
 水音の二筋かゝる野梅哉  
 はなに来る鶯も哉春の月  
 堇咲野になつかしき小草かな  
 花に余波春に名残て供養哉  
 こつそりと夜が明る也朧月

おと父  
 素士  
 戸雀  
 瓢風  
 春江  
 魯々  
 霞模  
 喜水  
 柳圃  
 吉田  
 姪ノ浜  
 、 、 、 、 、 、

山吹の垣をふかめて咲にけり  
 花咲て背戸門もなき山家哉  
 はるかぜが吹か野道の人通り  
 黄鳥の声に日影はなかりけり  
 雉子の声飴うち越こだま哉  
 まつ原や檜原も過て初桜  
 大空へ闇おし明て花曇  
 美しき土握りけりはつ蕨  
 いほの春ある夜は足らぬ枕哉

頓野 元岳 向浜 、 、 、 、 、 、  
 歌舌 涼風 亀岡 浦泳 喜詠 路松 雨踊 甫木 流泉

青柳は月の都の木なるべし  
 浦人の亦春雨にかくれけり  
 あを空は倦ぬもの也 堇草  
 梅が香にさのみ夜風もなかりけり  
 満川に洗ふ小松にみへて春の雪  
 うつくしき月みて戻る花見哉  
 いくらでも植て置たきすみれ哉  
 道芝の上を流れて春の水  
 大仏の軒は雀のかすみかな

新延 丹志  
 甘木 雪頂  
 、 帰来  
 竹丸 泉左  
 小竹 柳左  
 芦屋 何来  
 福岡 玉峨  
 須恵 雲平  
 小竹 曙川

泣にとは登らざりしを山桜  
ぽっかりと桜に明る谷間哉  
嶮さや有ものながら山ざくら  
かぞへたる月日が咲て梅の花

うらやまし柚が世帯も花曇  
蹇も桜にこゆる山路かな  
みまはして花に小竹筒の置所

筑後久留米 文角

、 良寛

、 芦月

、 冠山

丹波 汀波

、 烏墨

海老谷 自笑

年／＼に二日酔する花見哉  
日の脚の届く所やはつぎくら  
けふといふてみに行花も余波哉  
満月のころりと出たる柳かな  
春の山海みゆるかと人の行  
月夜から直に明たり梅の花  
をし鳥の通ひし道を朧月

すみよしにて

古寺は松にいはせて散桜

氷上 龜山 大山 武陵  
、 、 、  
未覚 酒楽 魯縞 文鳳 野楊

丹後宮津  
鷺八

鐘遠き夕べは余所の梅の花  
 夕山や人にまかせて散桜  
 爺婆々の飯くふ上や夕桜  
 寺／＼の鐘聞日也はつぎくら  
 湖の水はつめたし朝ざくら  
 燕の腹につかへる浪がしら  
 古人憎るものゝ詩に倣て  
 身にしらみ世には盗人花に風  
 たび人のはや泊りけり花の宿  
 花散て夜明の鐘の聞えけり

万籟 梅士 三孝 魚道 魯諄 芭尺 山田  
 、 、 、 、 、  
 石川 羽山 少年 枝鳥 蛙音

春の雪鴛の羽たゞく其間也  
はる寒き中の響や雉子の声

次津 里仙  
、 昨非

尼寺や背戸は桜の薄月夜  
谷水や墨にすりても春の色

但馬芝 尚古  
、 龍堆

あり明の濡て落たる柳かな  
山添や田一枚づゝ春の月  
鶴高く鳴てのどけき日和哉

因州河内 龍石  
鹿野 馬陵  
、 凡鳥

しら梅や近うなるほど花多き

去年の塵流し尽して春の水

猫の恋夜明の鐘も聞えけり

花咲て有べき山をながめけり

寝よいとてねられるものか春の月

花に鐘明日も聞ふと思ひけり

三度まで雉子に出逢ふ春辺哉

花も寝た様にみえけり朧月

青條

如行

五粒

平砂

蒲川

梅村

大蕪

碩遊

伯州三崎



おく山の椿流れて水ぬるむ  
 山吹の流を汲や美少年  
 鶯のなく時うごく小枝かな  
 うめが香に梅とはしれど人の背戸  
 麦の葉へ花ちりかゝるやよひ哉  
 野を横に吹れて嬉し梅の風  
 かへるとも居るともみへず小田の雁  
 川柳流るゝものは流しけり  
 野鼠の巢を囲ふたる筋かな

浜大谷、  
 伯州梅洞  
 大谷沾雪  
 久古、  
 久古沾荻  
 川崎、  
 川崎沾浪  
 三崎、  
 三崎宜哉  
 湖水  
 里月  
 梅洞  
 沾雪  
 徽州  
 沾荻  
 沾浪  
 一瓢  
 宜哉

梅さくや香に丸めたる風の角  
 はなよりも見心やすき柳かな  
 塩竈の煙おしあふ霞哉  
 氣に合た人の来よかし春の雨  
 長閑さやそれにもみへぬ鐘の聲  
 鶯や朝の日脚のさす所  
 うぐひすや吹矢を枝に小半日  
 琴の音や余所の花見も立止り  
 今ふみし氷障なし梅の華

|     |    |    |    |    |
|-----|----|----|----|----|
| 猪小路 | 福原 | 日原 | 熊黨 | 佐田 |
| 嵐月  | 丈砂 | 雪窓 | 、  |    |
| 薫草  |    |    | 枝鳩 | 沾草 |
| 花棠  |    |    | 一志 |    |
| 車尾  |    |    | 石井 |    |

手ざはりや霞の中の水の肌

春の夜や月を妬まぬ花の雲  
よごれたる雲の雲也山ざくら  
楼や笛は霞まぬ夕気色  
永き日や柳にとけて花の留主  
淡ゆきや日うらに残る松の雨  
散さくら水は都を流れけり  
いのちより外は思はず初桜

山賤は花に富たる夢也けり  
散ことは習はずも哉ちりざくら

、  
露磨  
花叔

庵の花酒なき日から散初る  
はな盛世に出嫌ひはなかりけり

石見  
池田  
暁芦  
秋里

いほの春は麦の尾花に隠れけり

作州  
瓠落

神垣も花は降けり此夕べ

大隅  
其鹿

余所へ行日ぐりする也梅の花  
月ありて奈良坂越ぬ花の空  
つゝがなき山家こと葉や梅の花

播磨魚崎 蘇明  
大塩 為形  
鹿間 田実

七草の春を定る匂ひ哉

備前岡山 幽雅

鶏のうちにも居らず春の雨

備中倉敷 五逢

花提てずんぶり暮す野中哉

鶯の思ふほど啼小家哉

西風のふたゝび寒き焼野哉

足輕の切風追ふて通りけり

備後福山 李朝

、 岱雨

田房 桃甫

、 寄居虫丸

都の住居とゝせばかり

にして古郷の春に逢ふ

古郷の花もみやこの香に匂ふ

花に泣人さま／＼のみやこ哉

あめの花心の余る夕かな

安芸広島藩内

甘露井連

玉桐

、 乙主

、 勃々

より添へば夕暮涼し花の陰  
 ゆら／＼と花のあかるき日暮哉  
 咲続く桜の中に馬のこゑ  
 さく花に藁家持たき山路哉  
 咲ものはあれど桜はさくら哉  
 世の春は只一目なり花の山  
 松風の吹ともみへず山ざくら  
 粧の静なりけり夕ざくら  
 目のとゞく迄は誉けり花の山

、  
 子恭改  
 、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 一兆  
 児龍  
 梅溪  
 松雨  
 綾彦  
 芦笛  
 百合丸  
 桐圭  
 蘭芷

満月の山に余りて桜かな

、  
鳳郎

松のあるところまで摘若菜哉

安芸広島  
松宇

傘さげて桜の中を歩行けり

、  
亘哉

春風の美しうする川原かな

、  
立丁

はるひとつ残して行や枝の花

、  
景和

手のひらのなまぐさう成堇かな

、  
路宅

桜より春のかたづく名残哉

、  
宇柏

はる雨の降もへらさず小米花

、  
春平



山かげは初菜の花に霞けり  
 夜の明て椿の家を尋けり  
 竹垣に花冴かへるつばきかな  
 うへた夜に動かしてみゐる桜哉  
 くれ／＼た所を蝶の一夜かな  
 薄紙の障子さしけり梅の花  
 一日来ぬ雨の燕氣にかゝる  
 桃の花けふはさくらの上に立  
 咲そめる手はひとつ也花の色

竹原 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃  
 たみ 古江 篤老 春可 雉郷 双蛇 国方 雨砌 敏彦

門先や榎のつかへておぼる月

周防小郡

古梁

鈴鴨の羽音がましや朧月  
雲は皆花に来て夜の明にけり

長門下関  
上ノ関

隣霞  
事白

鶯も啼て居る也桃のはな

讃岐

桃里

野は陽炎にしほる四ツ過  
人並に家もつ春のつい暮て

奇渕  
井眉

盥一ぱい灰汁のこしらへ  
宵月のしこ踏うち影もなし  
ひよいとのぼりし稲の花露  
代官のめでたがらるゝ石たゝき  
御座のあとをこそ／＼と掃  
よい事をいふて別れし片明り  
卯の木の花に愛のよせ有  
砂道の伊勢路へかゝる傍に杭  
嵐にみだす馬の立髪

里 眉 渚 雀 眉 里 吾 雀 渚 里

灯のしら／＼となる朝の月

斧をうち込薄霧の中

どの山も大かた冬の近付て

風よけにする門の積藁

窟みたる硯を花にさし出し

なりより高ふ匂ふ独活の芽

右一折

御室にて

咲にけり花の雲井に人群る

讃岐

芝峰

執筆 里、雀里雀

大和路は徑を往ても桜かな  
 鶏の砂かきかぶる春日哉  
 三月菜譽て去けり桜人  
 朝ごゝろ届く所に雉子の声  
 我庵や寝どころ迄も春霞  
 下駄かれば消る二月の小雪哉  
 うぐひすに別れて寒き山路哉  
 這歩行様にみへけり田の霞  
 ちる／＼と申兼たり梅の華

和 田 浜 〃  
 觀 音 寺  
 小 豆 島  
 無 物  
 梅 勝  
 之 上  
 路 九  
 内 海  
 ゑ ち  
 萬 頃  
 蘭 舟  
 霜 操

寝ても／＼ねぶたき春の別かな

浦の家は浪にあらても桃の花

行春や三朝も同じ竹の雨

歌僊表

寒いとて明ぬ夜はなし梅の花

わたりかけたる川の雪しろ

年／＼の春を燕の宿にして

食ものまでがみな雫也

さす月の松は時雨の跡に立

、 、 、

ふく

橘中

島芽

千崖

島芽

崖

芽

崖

冬のしをりを見せる炭焼

芽

右

不惑の春を迎て

鶴に乗老のはじめを花心

讃岐仁尾

宗徳

さくら養ふあけぼのゝ空

春風が吹けばいづこも畑ふえて

ゝゝ

右

春の夜はあからさま也泊瀬山

摂津尼崎

春人

雉子が出て奇麗にしたり小松原

池田

未徹

梅白し花をそこなふ虫もなし

ゝ

瓜坊

春の夜や忘れて居たることの有

大坂

春思

行雁の声の下よりはつ桜

、

鶯雪

二三輪小ざくら咲ぬ我守りぬ

、

米彦

散花の梢はひくし鳩の海

、

丹頂

根をふめば響やすらん山ざくら

在坂薩摩

青梁

門口に椿咲けり水ぐるま

兵庫

芝蘭

笛の鳴かたへちら／＼散さくら

河内交野

古光



朧月おとなく汐のさす夜かな  
昼寝する日和交りし桃の花

泉州堺

金花  
句龍

夕さめや大路をいそぐ蝶一つ  
春の雪扇にのせて戻りけり

伊賀上野

梧鳥  
猪来

有明の鐘はしづみて花の中  
月の朧花のおぼろやなくかはづ  
夕照の遠山桜おぼろなり

伊勢神戸  
津女

里鶴  
梅露  
蘭圃

おしなべて花に曉行よしのかな  
 夜ざくらの下行我にこぼれけり  
 いとゆふや馬引つるゝ川向ひ  
 ぬしや誰そ梅つれ／＼の荒畑  
 等閑に牛引捨るやけ野哉  
 暮兼て居るよあたりの白椿  
 梅の事はぬ日もなし梅の花  
 豆腐こそ下手なれ花の奥山家  
 蝶々の眼をつけて飛垣根哉

、 上 の  
 、 松 坂  
 、 津  
 、

樂 山  
 菊 坡  
 祐 之  
 かゝる  
 香 蘭  
 紫 酉  
 権 己  
 塩 叟  
 霞 外

磯がくれして咲にけり梅の花

山田

鶴鳴

みる人が花の主ぞ山ざくら

尾張名古屋

鹿野

散時にやう／＼花を手折けり

三河和泉

和楽

ちるならば我に沙汰せよ山桜

、

柯亭

帰らんとては見直す桜哉

、

桐屏

雲に入鳥をみてから山ざくら

参河

霞洲

亦みても／＼花は珍らしき

、

木常

みあげては取付て来る桜哉

美しう咲ほどさくを山桜

花咲けば花の事いふ庵かな

そこから子供かけ出る桜かな

遅き速き花に都を草鞋がけ

春の雪降ともしらず寝たりけり

松柏どれもよけれどさくら哉

如月のある夜は冬に戻りけり

相州萩野

、 、

榎堂

朱鶚

桐居

保舟

秋挙

許笠

水砂

一蘿

桃山はもゝにかたぶく日影哉  
遊ぶにはよき夜と成て鳴蛙  
夢いくつ数へて花に向ひけり  
花の山いづれの尾より筆満ん

、 、 、 、

牛道  
東洞  
浦唄  
輦玉

さくらにもよくを申さぬ山家哉  
みにくれば遅し早しの山桜  
取しめぬ軒端わたりや春の猫

東武  
行脚  
江戸

毛丸之坊  
甫滴  
春蟻

夜に余る雨駒鳥に晴にけり

下総結城

腸谷

日の入の大きうみゆる桜かな

常陸

叭介

聞なれしこゑや桜のうしろ山

甲州

文川

春雨の降につけても藁屋哉

、

芦雁

うらゝかや山のうへより富士の山

小原

田鶴守

碓を作る小くちやうめの花

甲州

方居

春雨や今宵のおとも海松海雲

、

有斐

花の宿いかい事居る在家僧  
岡の日や田螺かせぎに行からす

、 、

重行  
草丸

ものぐさに暮して居れば梅の花  
堇にも酒のむいほの戸口かな

信州飯田

叙人  
梅江

湖に山がうきけり春のかぜ

、 、

雨郊

梅の垣くゝらん炭の虚俵

、 、

鯉川

おろかさをせむるか庵に鳴蛙

、 、

梅彦

鶯に火をうちかける山路かな

、 、

柳化

黄鳥の夢をみたれば初桜

下萌や花の咲くさちかぬ草

蛙啼夜の騒ぞ月の雲

花の事寝言にいふて奇麗也

きのふよりけふはなつかし春の風

みし花も昨日となれば気の弱り

田家

壁の菜はいつなく成ぞ花盛

逢坂を通りかゝれば夜の雉子

、

、

、

、

一色

善光寺

、

古斎

桐甫

何頼

蕉雨

我笑

呂吹

希言

儲史

飛州高山



棣棠や芒尾花は柴と成

能登宇出津

碩茂

雁鴨のうつくしう成て帰りけり

馬場

玉史

畑中やひつたばねたる木瓜の花

輪島

輕黄

人声に魚も浮けり花盛

ソラ

岸芷

春の夜や鳥の寝に行里も有

黒島

加由

山桜盛といふ日なかりけり

上毛磯部

口々

夜ざくらやどの枝折戸も明てある

一風

白魚や江戸は鬻のいさぎよき

旅に寝しことも有也花の雨

鰻にしなぬ命を驕る桜哉

霞むほど霞てものゝ動き哉

菜の花や嵯峨はあかるき人の家

よき雨のこぼれ出しけり葦草

、

榛名桮

草津

奥州弘前

、

出羽森丘

紫陌

此教

鷺白

英有

桃仙

仙風

深山木を春になしたる月夜哉

南部都古

北溟

山陰や桜覆ふて水寒し

越后山谷

昇魚

降ほどの雨に花さく山辺哉

新潟

喜年

しら梅や一重にしては此句ひ

塩沢

牧之

明たかと出てみる門のさくら哉

上十日町

守白

長閑さのゆふべも浪はかへりけり

柏崎

平水

湖をみて来て柳さしにけり

高田

左琴

月の有空にかくれて帰る雁  
 桜花深山心はなかりけり  
 鳥の身も軽うみえたり花の山  
 咲たらぬ桜に気色定りぬ  
 うらゝかに花をみる也夕あらし  
 梅咲て紙子にたらぬ嵐哉  
 足る事を知て花みる心哉  
 うつかりと傘ふり上て夜の梅  
 夜もすがら桜定めて独かな

越中魚津 孤山  
 、 其竟  
 、 徐生  
 、 眉秀  
 、 梁月  
 、 周台  
 四方 關士  
 、 百禄  
 水橋 文器

下風はありて桜のさかり哉  
 手折らんや花には蝶の夢現  
 現在の花はかはらで新しき  
 梅がゝに家作らんと思ふ也  
 日の筋や柳定めぬ朝朗  
 山ふかき気色を花の盛哉  
 春雨は柳の為に降ものか  
 夕暮は散桜よりみえにけり  
 更科の哀にも似よ春の月

堀岡 〃 明神 殿村 三十三ヶ  
 海老江 〃 氷見 〃

旧湖 曾融 磯山 加白 花友 梅仙 如龍 女仏 南士

柳には紙りも付よ梅の花  
はつ午や是从から山も人の声  
日の入や雲雀は山のあるたより  
朝／＼の雫ほど咲梅の花  
かげろふは轍より立都かな  
さかしきは春の青夜の鴉かな  
蛙啼て楨の木の間の真昼哉  
山寺はけふも掃也松の花  
春風や莚戸張の恨なる

、 、 、 、 、 、 、 、 、

橘浦 加徴 秀邦 柳士 樹風 春和 烏明 三秋 久屋

梅が香の透間にみるや人の顔  
 駒鳥の声に消たる紙燭哉  
 並松のそこにも啼や夕雲雀  
 あさ風のあとの付けり梅の花  
 駒鳥に門引明るきほひかな  
 ちら／＼と散が桜のまこと也  
 さは／＼と花立去れば夜の姿  
 梅が香や榛までの月夜也  
 尾を立て雉子の走るや雪の上

、 、 、 、 、 、 、  
 八尾

千里 乙魚 会盟 如芳 春海 周泰 菊二 竹老 東花

夜／＼の桜に馴染榎かな

富山

洒上

帰るやら雁は多くぞ成にけり

嵐丈

眠を覚す雄鹿みてこよ春の草

見方

白梅の瘦た匂ひはなかりけり

耳洋

炭売が宿と答へて咲李

風香

明ながら月は帰りにて花の上

鳥休

ゆく春をいらつに似たりきじの声

椿斎

花の日のあらぬ小藪に入にけり

加賀金沢

甘谷



梅さけば椿もらひに人の来る  
 来てみむと思ふそこの花の雲  
 猿曳のおのれに似たる日和哉  
 はつ花や地によむ程の杖の跡  
 春来てもきても椿とうめの花  
 雲と梅花ちらば春の越路哉  
 鶯の一声ほしや野の小まつ  
 朝の日をかゝへて臥せり雉子の声  
 川狩ては松霞まるゝ計也

、 、 、 、 、 、 、 、

竹 年 梅 馬 淇 鈍 文 兎 蘭  
 寿 緒 廬 紅 亭 車 淇 文 吹  
 伊

谷間や苗代水もさくら川  
 誰がいふとなしに山家の桜哉  
 うめの花葛屋に気色出来にけり  
 流て来て柳にすがる蛙かな  
 はつ桜何日おくれる証拠なれ  
 朧月網代木などもみゆる所  
 手もつかぬ今朝の気色ぞ梅の花  
 梅一木あるがうへには月ほしき  
 さればこそ花の散日も夕桜

、 金 本  
 、 沢 吉

井 中 友 春 乙 白 燕 夕 圃 一  
 館 樹 輝 彦 二 石 水 山 瓢

山川の有て朧の月夜かな  
 新家にたやすく馴て花盛  
 我帰る跡や戦風花ちりぬ  
 草薙踏出しがほや春の鹿  
 やみの夜をうち任たる桜かな  
 菜の花や上京あけて竹の隙  
 風追ふて燕も来たり花の中  
 有明の夜はどちらから花の宿  
 魂のうつゝに入かはなのあめ

高松 松任 鶴来 〃 〃 〃 〃 〃

素羽 馬井 其枝 一湊 車大 歌瀧 桃林 甫水 自明

何ひとつ倦ものはなし花の山  
行春の眼先になりぬ伊吹山

越前丸丘 友甫  
、 素更

踏迷ふ道おもしろや山ざくら  
はつ花に鹿まで出たる日和哉  
うき世には似ぬ畑なり桃の花  
暁の鐘暮の鐘聞さくらかな  
さる曳の猿も取けり土筆

若狭食見 花雪  
遠敷 千好  
成出 北洋  
田井 牛戾  
前川 寿卜

小雨降中に堇の春べかな

柳にも一日は暮ぬ御忌詣

春の月鐘さへ遠し草の家

世の春を麦に隠るゝ鶉かな

白魚のみゆる程なり水の月

はる雨や樹々は慥に夜の更る

蚊の声におどろく花の夕かな  
あけぼのゝ柳も見えて春の山

小川浦

生倉

気山

向笠

ゝ

佐古

近江水口

八幡

素帆

節肆

青柳

貫卮

青芝

正鳥

蜃州

可盈

此頃やどこの日暮も梅の花  
 宵月の影みゆる間やはつ蛙  
 夕ぐれの来る顔もせぬ椿哉  
 さればこそぬるみ安きも京の水  
 大井川つもりて花の下雪  
 あらしして御衣吹花の夕哉  
 道とへば辰巳の庵や山桜  
 春風や売人形も女がち  
 はつ花に二日の雨のあかり哉

彦根 〃 〃 〃 日野 〃 〃 〃 麻生  
 茄音 芳之 紫石 白文 松蘿 紫英 随波 士明 不得

あか桶の輪のゆるみけり散桜  
 寝所の替るや花の咲しより  
 草臥た草履亦はく霞かな  
 春風や都を走る牛車  
 くらき夜を鳴しづめたる蛙哉  
 かげろふや人の出て居る畑より  
 よい家を持家みえて山桜  
 俳を残して暮るさくら哉  
 山桜雲は一段きれてあり

大沢 権馬  
 田井 重塊  
 野田 寵山  
 万木 北馬  
 太田 乙鶴  
 舟木 鳩人  
 力モ 仙景  
 稲渕

下駄はきて棹さす人や春の雨  
 鶯と並んで霞むちどり哉  
 戸口まで雨に桜の盛かな  
 野仕事の余る里あり梅の花  
 山鳥を追ふて登れば散さくら  
 春風や年経てみゆる谷の橋  
 うぐひすも手分して鳴せ東山  
 引鶴も戻らで松は霞みけり  
 山吹の夜浅き月と成しにけり

舟木 荷篠  
 、 獅丸  
 大溝 阿石  
 、 湖月  
 、 無禁  
 、 一居  
 堅田 友鹿  
 、 紫溪  
 、 五粒



行春をこちらへ吹ぞ松の風  
 長閑さを立延る也小田の鷺  
 夕ぐれをしつかりうける柳哉  
 目じるしの桜咲けり丹波山  
 梅にみし月より丸し花の上  
 行春や平野の宮司ものいはず  
 むかしめくものは桜の木かげ哉  
 うめ折てのけば鳥啼堤かな

|    |    |    |     |    |    |    |    |
|----|----|----|-----|----|----|----|----|
| 阪本 | 、  | 大津 | 三井寺 | 走井 | 、  | 、  | 、  |
| 于當 | 申齋 | 宇洋 | 千影  | 鳥頂 | 幸彦 | 歌曉 | 文常 |

小流れに筏もありて山ざくら  
鐘つけば落出す花の雫かな

城南宇治  
八幡

之風  
葦笠

雪みした蓑着て行ん雨の花  
代々庄屋持べき家や八重桜  
花ざかりはあるからに人の春  
佛を雲に残すや花の山  
夕やみや桜へさして死ん事  
白いをや先水にみるはつ桜

洛  
、 、 、 、 、

斗雪  
斜山  
其独  
一之  
眉両  
芝山

山水の山めぐる也夜の花  
 春の月夜小袖の垢の匂ふ也  
 水あびて花に帰るか山鳥  
 川おとを後に聞て梅の月  
 昼の鐘花あるかたの賑しく  
 柴刈も霞の人となりにけり  
 小まつ野や雉子を毎日みる所  
 暮る時桜は少しもの凄し  
 何するもおなじ拍子や壬生念仏

、 、 、 、 、 、 、 、 、

千代道 桃江 魯竹  
 琴巴 峨雪 砂帛 霞城 李溪 月橋

夕虹のはしに声ある雲雀哉  
 行雁の打めぐりつゝ浮御堂  
 山風や花の下枝鳥さはぐ  
 八重桜人さとれとはちらぬ哉  
 朝夕に霞相手の野松かな  
 なかばより屋根の重る桜かな  
 有明の暁にちかし花の雲  
 鶯のゆふ音とめるや山ざくら  
 しらぬ夜の明て来る也花盛

、 、 、 、 、 、 、 、 、

玉糸 花明 馬遊 芹水 漢水 万栖 十壺 国雄 布雪

山吹は日にそまりしか水の上  
 花に来て月みて戻る嵯峨野哉  
 蛙音を入るゝ夜もあり草のいほ  
 ふすぼりし家越に高し山桜  
 暁はよそ外もなし梅のかげ  
 湖のはしを曇らす桜かな  
 桜さへあればかゝりぬ朝の雲  
 さくら散音をきく迄夜更たり  
 日がくれてあれどもみゆる桜かな

、 、 、 、 、 、 、 、

石哉 芦涯 柏雨 乙道 芙九 僊芝 梅涯 曲肱 梅價

暁の雲を汚すなちりざくら  
入相は桜散る也はつ瀬寺  
山吹の気色み出すや一曇  
花の雪木の葉ともしにけふも来る  
おしあてゝものごと違ふ桜哉  
いそがしう西よ東よ花七日  
二木ともなくて柳の山路かな  
苗水の流れも久し花供養  
花供養我は年寄覚悟哉

、 、 、 、 、 、 、 、

宋也 一熊 梅二 百丸 茂良 百池 月峰 岱李 其成

筭に桜ちらすな小傾城  
 家土産のさくらに道の嵐かな  
 夜の雨やがて桜の降にける  
 八重桜夜の心のうごきけり  
 夕ざくら鐘は心をせまらする  
 川上の余寒のみゆる立木哉  
 手枕やおもふ所になくかはづ  
 大空の外に夜を持さくら哉  
 ゆふ飯の夜に入花の盛かな

、 、 、 、 、 、 、 、 、

書林

橘栄 在貫 六轡 荷屋 白黛 素頑 眞菅 宗樹 千崖

遅桜供養をいそぐ気色哉  
脈とりてみるや花の夜唯ひとり

、

芭蕉堂

蒼虬 雪雄



跋

木をわつて花のあかりを  
たづね、竹をさいて君  
子の心を操らむより、常  
に此俳諧に遊びて心

三五才

朗に歳々花に逢ん  
とぞ

吟万 大蕪

烏丸下立売上ル町

芭蕉堂書林

勝田善助

（裏表紙見返し）

（裏表紙）